

0地点 (2021-)



北海道札幌市
中央区北1条東
11-15-22

0地点は、札幌を拠点に活動するアーティストらから、築90年以上の古民家を利用して2021年に開設したアートスタジオです。現在は、入居アーティストの制作スタジオとしての利用はもちろん、不定期でオープンスタジオやイベントを開催し、地域の方や芸術文化に興味をもつさまざまな方の交流場所になることを目指しています。

A3 0地点を運営して4年ほど経ちますが、これまで7名の入居者の入れ替わりがあり、流動的で代謝のある緩やかなコミュニティとして運営できているかと思えます。美大や芸大のある都心部とは異なり、集団として強固なコミュニティを作らなければならないという競争意識を持たずにあくまで各々が「一時的な札幌の居場所」として活用していることが魅力のひとつだと思っています。



中崎透の展示風景

A2 スペースでのイベント開催日、最近で来たという近くを通りかかったタコライス屋さんか、カゴに入れたタココリスを押し売りしている、何人かが500円ほどで購入し、お店の所在地も知らぬまま去って行きました。美術をやっているという経済的に思い悩むことも多いですが、人が集まる場所に強引に入り込ませるには、そういう場所をおもむく、時にお金を介したコミュニケーションに繋がると感じています。

A3 大学を卒業したばかりの作家や、地元である程度展示歴を重ねてきた作家など、メンバーの入れ替わりもあって、幅広い背景を持った作家が集まっており、同級生がそのまま共同アトリエの延長で始めたスペースや、キャリアのある程度始まった作家が集まるスペースよりも、友達の家感覚でゆるいコミュニティのように維持されている小さなコミュニティのような時間が流れることがあり、それを数年続けていくことに可能性を感じています。

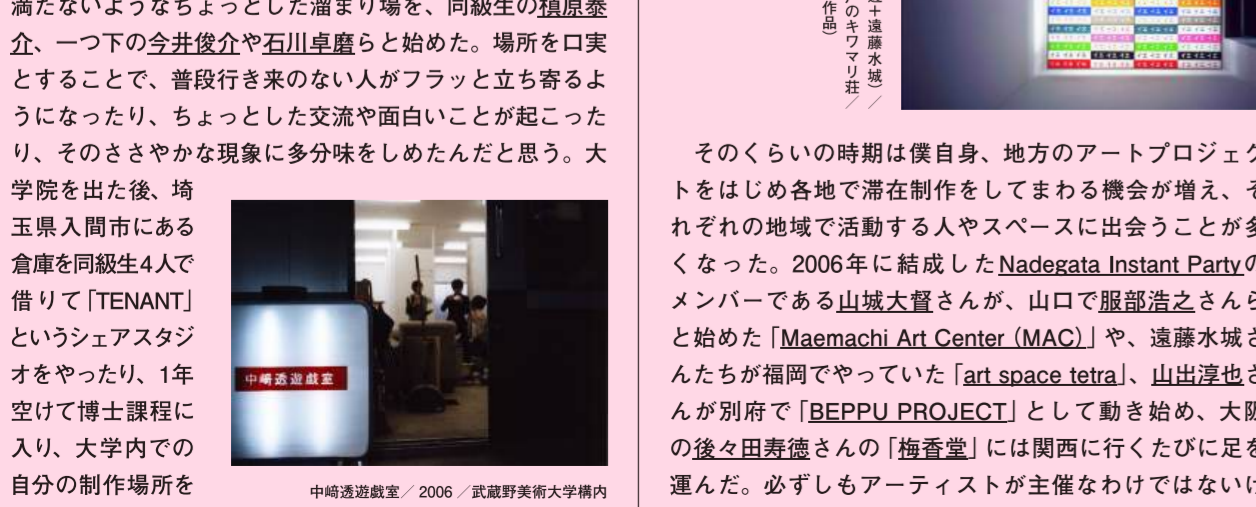
アーティストによるもう一つの居場所作り 中崎透

縁あって、「アーティストトランススペース」や「オルタナティブスペース」についての寄稿を頼られました。最初に結論から言ってしまうと、自分たちで場所を持って運営して、といったこと一番大事なことは何かという、圧倒的に自由だということです。それがたええ3畳にも満たないようなささやかな場所であったとしても、自分たちにとって自由である場所があることは、何かを守り続ける人にとってささやかな重要なことだと思っています。

なんか、ダメかも。ですまず調をお願いします、との依頼だったけどよく続かないので、以降普通のだけたかじりで書き進めますね。ちゃんとした裏取りをしてるわけじゃないけど、「オルタナティブ」という言葉は、「別のやり方」、「もう一つの方法」といった意味があり、美術の中だと美術館や商業画廊といった正当な場所としての美術空間に対してのカウンターのような位置付けで、「オルタナティブスペース」という言葉や、その言葉の指す活動、スペースはアメリカ発祥で使われるようになった。その中でも運営や活動の主体がアーティストである場合、「アーティストトランススペース」とも呼ばれるが、わりと近い意味で使用されることが多いかもしれない。

ここからは僕自身やまわりのことなどを、なので偏った目線にはなると思うけど、2000年代前半の西東京界隈と2010年前後の地方のスペースのことを中心に話していこうと思う。1997年に武蔵野美大の油絵科に入学して、それから10年ほど小平市の大学近くに住んでいた。2000年くらいの、自分でも作品を発表し始めた頃は、先輩たちや同級生など、まだまだ銀座の貸ギャラリーを借りて初期の個展をするケースが多かった。気軽にコミューンギャラリーが卒業したばかりの若手作家を積極的に扱っていたのが2005くらいだったかな。

その頃くらいの時期に、大学院のアリイの片間で「warehouse art project (whap)」というスペースと呼ぶにも満たないようなちよつとした床張り場、同級生の植屋泰介、一つの今井俊介や石川幸麿らと始めた。場所を委金とすることで、普段行き来のない人がフラッと立ち寄るようになったり、ちょっとした交流や面白いことが起こったり、そのささやかな現象に多分楽しめたんだと思う。大学院を出た後、埼玉県入道市にある倉庫を同級生4人で借りて「TENANT」というシェアスタジオをやったり、1年かけて博士課程に入り、大学内で自分の制作場所を



中崎透の展示風景

久保勝大 アーティスト

A1 一人で活動をしていると出口が見えなくなる問題に対して、具体的な見通しを持って考えられることです。作家間の交流を深めるアイデアとして、デジタル機能を持たせるとか、スペースを貸して外部の作家に提供するか、1人では色々な場所におもむくことができないことを、呼び込む方法を考えて選択役を持っているのは良いことだと思います。その逆に、資金を自身の制作に全て投入できないことは、少し活動の幅を制限しているとも感じます。

A2 スペースでのイベント開催日、最近で来たという近くを通りかかったタコライス屋さんか、カゴに入れたタココリスを押し売りしている、何人かが500円ほどで購入し、お店の所在地も知らぬまま去って行きました。美術をやっているという経済的に思い悩むことも多いですが、人が集まる場所に強引に入り込ませるには、そういう場所をおもむく、時にお金を介したコミュニケーションに繋がると感じています。

A3 大学を卒業したばかりの作家や、地元である程度展示歴を重ねてきた作家など、メンバーの入れ替わりもあって、幅広い背景を持った作家が集まっており、同級生がそのまま共同アトリエの延長で始めたスペースや、キャリアのある程度始まった作家が集まるスペースよりも、友達の家感覚でゆるいコミュニティのように維持されている小さなコミュニティのような時間が流れることがあり、それを数年続けていくことに可能性を感じています。

A1 長い間、仙台に不足していた「適度な広さを持つ自由な展示スペース」を確保することは、自分で考えて多くの作家たちにとって、共通の課題・願ひでした。当時の仙台が、めっきり少なくなっていた展覧会(個展)が、アーティストトランススペース誕生によって、毎週コンスタントに開催されるようになって、多くの刺激や交流が生まれている。半面、作品作りとは別な雑務が増えるのも事実です。現在の自分は運営から遠ざかっておりませんが、

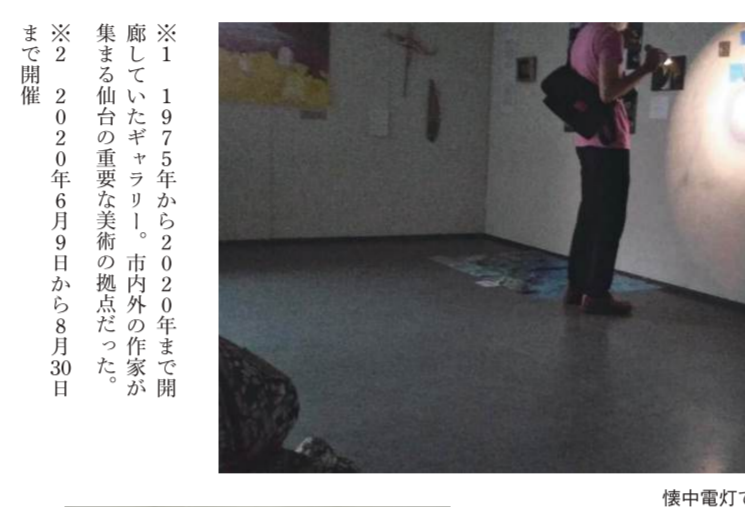


久保勝大の展示風景

アーティストによる集団的自家製の作法

SARP (2010-) 仙台アーティストランプレイス

作家が運営する形態の展示スペース。これまで仙台で35年続いできたギャラリー青城(※1)のスペースを、維持継続させ、より活性化させていこうと、作家連自らが立ち上がり実現した場所です。地元を中心とした作家30名以上が、同等の立場、条件でこの試みに参加しています。



作家が運営する形態の展示スペース

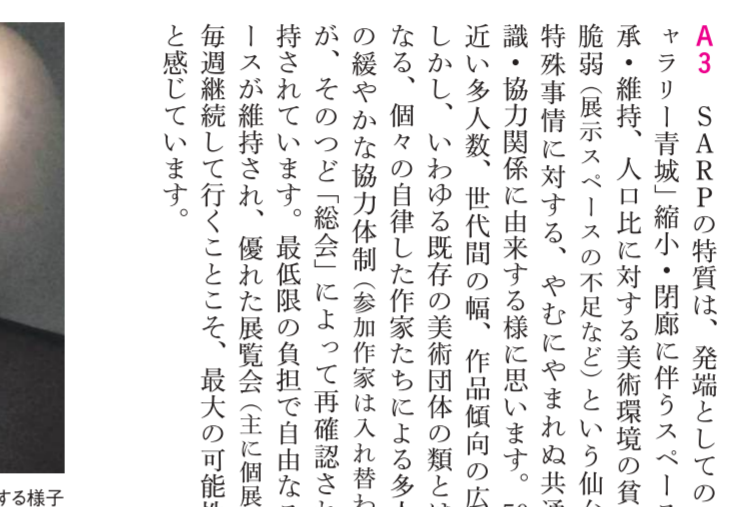
A1 メリットは単純にアーティスト活動をしていく上での選択肢や視野が広がることだと思えます。設立当初はコロナ禍ということもあり、黙々と生きてきたスペースだったのですが、場が生み出す関係性やその広がりが方には驚かされました。一方で、共同での動きに時間やコストなどが取られ、自発的な活動が疎かになる危機感を抱きながらも運営をしています。拠点の一つとして活用し、0地点と頼らずに離れていく意識も大切な点だと思います。

A2 印象的な出来事はいくつもあるのですが、何気ない日々の会話を通して、繋がりが一番に思い浮かびます。会話の全てを覚えておく必要はないのですが、日常的な会話から制作の話にシームレスに話題が移り変わっていくのを見てみると、日々の暮らしが各々の表現活動と地続きになっているのが理解できます。この移り変わりを身近に感じることができているのはとても素敵で印象的な時間だと思っています。

A3 0地点を運営して4年ほど経ちますが、これまで7名の入居者の入れ替わりがあり、流動的で代謝のある緩やかなコミュニティとして運営できているかと思えます。美大や芸大のある都心部とは異なり、集団として強固なコミュニティを作らなければならないという競争意識を持たずにあくまで各々が「一時的な札幌の居場所」として活用していることが魅力のひとつだと思っています。

田口虹太 アーティスト

A1 スペース運営ということと名刺刺し会話の種があることと助けられる場面はいろいろとありまねか。しかし、「スペース運営」という活動・経験を超えないことは自戒しています。また、入居メンバーのジェンダーバランスが男性に偏り、ほかにも何かひとつの思想を形成してしまっているように見えることに問題を感じています。トイレルの清潔感や安心できるスペース機能を持つこと、今でこそ一瞥ずつ解消したいと考えています。



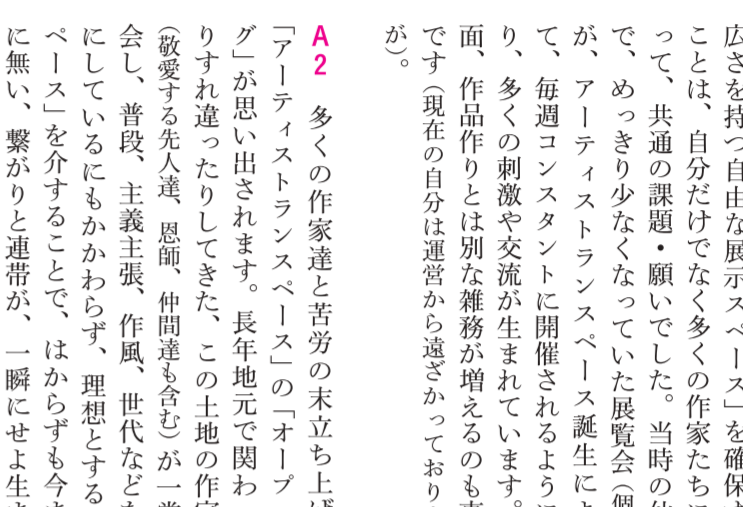
田口虹太の展示風景

A2 歩いて10分圏内の中に「faboon art studio」という旧街並工場を活用した中堅作家の集合アトリエがあります。様々な関係者がそのアトリエを訪れるのですが、ご厚意で若手のスタジオとして0地点を紹介いただけたりすることがあります。都度思いだけけるフィードバックや感想、交流は印象的な機会となっています。

A3 北海道の美術に関するレクチャーを紹介機会があり、本田明浩という彫刻家が紹介されました。彼は、雪や寒さに見負けず保温を保ちながら、自分を見つめ思考する時間こそが、目には見えない北海道の何かであると感じていました。私たちのスペースは、建物の断熱リノベーションを行い、熱を逃さない環境をつくることからはじめました。まさに今、私たちは先人たちが表現した北海道のものを体感しながら、新たな表現を紡いでいる。そして、まだ歴史が浅いと言われる北海道の文化の一端を担うことができる可能性を感じています。

小岩勉 写真家

A1 写真に限れば、70年代に多くの自主ギャラリーが生まれ、その後メロウ系などの企業ギャラリーが設立されたことで自主ギャラリー時代を知らない世代は、企業、団体の利害と離れた自由に展示できる自分たちのスペースを望んでいました。SARPは、おそろしく美術に関わる人々が待ち望んだものだったと思います。メロウ系以外でも当然で、資金繰りの難しさはどのギャラリーも同じだと思っています。



小岩勉の展示風景

A2 随分前のごですが、展示作品に含めた薬剤の影響でギャラリー全体に強い匂いを感じていました。

A3 コロ禍を乗り越え、スペースを維持するために行われた「SARP定例観望」※2は、アーティストランの特徴が生きていた企画だったと思います。長期開空けしなかった空間を速に開示して、その期間は作家が自分で自由に展示し、それをSARPのSNSで発信しながら、記録をとっていくという仕組みでした。予算を削減するために、無人で電気を使わず、暗くなってからには懐中電灯で展示を見てもらいました。

青野文昭 美術家

A1 長い間、仙台に不足していた「適度な広さを持つ自由な展示スペース」を確保することは、自分で考えて多くの作家たちにとって、共通の課題・願ひでした。当時の仙台が、めっきり少なくなっていた展覧会(個展)が、アーティストトランススペース誕生によって、毎週コンスタントに開催されるようになって、多くの刺激や交流が生まれている。半面、作品作りとは別な雑務が増えるのも事実です。現在の自分は運営から遠ざかっておりませんが、

A2 コロ禍を乗り越え、スペースを維持するために行われた「SARP定例観望」※2は、アーティストランの特徴が生きていた企画だったと思います。長期開空けしなかった空間を速に開示して、その期間は作家が自分で自由に展示し、それをSARPのSNSで発信しながら、記録をとっていくという仕組みでした。予算を削減するために、無人で電気を使わず、暗くなってからには懐中電灯で展示を見てもらいました。

A3 コロ禍を乗り越え、スペースを維持するために行われた「SARP定例観望」※2は、アーティストランの特徴が生きていた企画だったと思います。長期開空けしなかった空間を速に開示して、その期間は作家が自分で自由に展示し、それをSARPのSNSで発信しながら、記録をとっていくという仕組みでした。予算を削減するために、無人で電気を使わず、暗くなってからには懐中電灯で展示を見てもらいました。